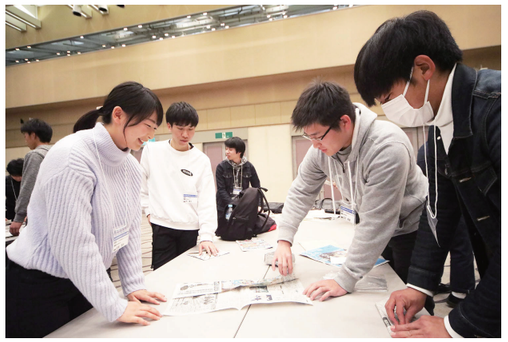
アイスブレイク

初対面の人同士の話すきっかけづくりとして
アイスブレイクを実施しました。

ワークショップ

新聞紙で作る紙皿や紙コップなどいざというときに役立つ防災アイテムを作成しました。



交流会

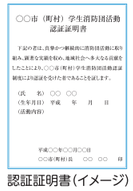
県内の学生消防団員・パネリストによる交流会を開催しました。

愛知県からのお知らせ【消防団に関する制度のご紹介】

学生消防団活動認証制度

真摯かつ継続的に消防団活動に取組み、顕著な実績を収め、地域社会へ多大な貢献をした大学生、大学院生又は専門学校生等について、市町村がその功績を認証し、就職活動を支援することを目的とする制度です。

採用にあたり、大学生等から市町村が交付した認証証明書の提出があった際は、積極的に評価をいただきますようお願いします。


○○市（町村）学生消防団活動
認証証明書

下記の者は、真摯かつ継続的に消防団活動に取り組み、顕著な実績を収め、地域社会へ多大なる貢献をしたことにより、○○市（町村）学生消防団活動認証制度に該当者を告げることを証します。

（氏　名）○○　○○
（生年月日）平成　年　月　日
（活動内容）

平成○○年○○月○○日
○○市（町村）長　○○　○○　印

認証証明書（イメージ）

消防団協力事業所表示制度

事業所の消防団活動への協力が社会貢献として広く認められると同時に、事業所の協力を通じて、地域防災体制がより一層充実されることを目的とした制度です。

「消防団協力事業所」として認められた事業所は、取得した表示証を社屋に提示でき、表示証のマークを自社ホームページなどで広く公表することができます。

「消防団協力事業所制度」
表示マーク

あいち消防団応援の店検索サイト

お店や事業所等に消防団応援の店として登録していただき、消防団員やその家族に料金割引などのサービスを提供することにより、消防団を応援していただく制度です。
詳しくは「あいち消防団応援の店検索サイト」をご覧ください。（https://shobodan.pref.aichi.jp/ouen-shop/）
または、「あいち消防団応援の店」で検索してください。

「あいち消防団応援の店」
制度のご紹介

開催報告

愛知県

あいち学生消防団交流シンポジウム

愛知県では、2月10日（土）に名古屋国際会議場 白鳥ホールにおいて、学生消防団活動の活性化を目的として「あいち学生消防団交流シンポジウム」を初めて開催しました。

主催者挨拶　愛知県防災局長　相津（あいづ） 晴洋（はるひろ）

学生消防団のみなさまに、日頃から地域の安全安心にご活躍をされていることに対し、改めて感謝を申し上げます。大学は４年間しかございません、今後いろんな進路があるかと思います。必ずしも地域に住み続ける方ばかりではないかもしれませんが、それぞれ職業に就かれ新しい生活が始まった後も、地域の防災力の要である消防団員としての活動を継続をして、地域の防災リーダーとなっていただきたいと思います。

基調講演　（公財）「にっぽんど真ん中祭り文化財団」専務理事　水野（みずの） 孝一（こういち） 氏

学生が地元と起こしたムーブメント～にっぽんど真ん中祭りのあゆみ～

にっぽんど真ん中祭りの 20 年間を、「創成期」、「拡大期」、「成熟期」の３つに分けてご説明します。

●まつり成熟期～ど祭りのいま～

毎年８月末日に名古屋で開催、220 万人の来場者、２万人が踊るお祭りで、集客難といわれる昨今、奇跡的な成長を遂げ日本最大級のお祭りといわれています。観客動員ゼロ。誰もが踊れる祭りの象徴「総踊り」はギネス世界記録にも認定されています。ボランティアの数、約７千人。地元自治組織４万８千人。そして、約 780 人の大学生たちが祭りの運営を担っています。しかし、はじめからこんな仕組みがあったわけではありません。

●まつり創成期～ど祭りのはじまり～

今から20年以上前、当時大学生の私たちはスキーサークルを作りました。メンバーを募集する中で、北海道出身の学生から「よさこいソーラン祭」に誘われ北海道へ行き、衝撃的なものを見ます。同世代の学生たちがイキイキと踊り、幅広い世代の人たちが祭りに参加している。幹線道路を止めた非日常空間を、同世代が作っていることに、大きな嫉妬心を抱いたんです。
そして「名古屋でお祭りを作ってみたい」と、同じ思いを持つ学生５人と実行委員会を作ります。私たちは名刺と企画書を作りスーツを着て、ビルの上から下まで、当時「シャワー作戦」と呼んで、１日１ビル、１日 25 社訪問というノルマを課しました。門前払いがほとんどですが、それでも自分の思いを言葉にしていると、たまに相手へ伝わる瞬間があるんです。
自分の思いを言葉にするのは当然大事です。けれども 100 軒ぐらいでは、ようやく自分の思いが言葉にできるぐらい。200 軒ぐらいで、いま伝わったかもしれないっていう感覚がわかってくる。そして 300 軒ぐらいでやっと、共感が生まれたっていうことがわかるんです。「若者のエネルギー・発想」は重要ですが、私たちには思いを受け止めてくれる経験豊かな大人がいたんです。それが 300 人に１人の存在です。その大人は思いを具現化する力を持っています。この出会いが祭りを０から１に押し上げた創成期です。

●まつり拡大期～ど祭りの使命～

どうやってこの祭りが成熟に向かっていったのか、実は拡大期に秘密があります。当時私たちは、キャラバン隊を編成し、東海３県、256 市町を回りましたが、地方に行くほど深刻なニーズがあることがわかったんです。新興住宅地では近所のことがわからない、過疎の村ではもう村の担い手がいない、といったものです。そこで地域活性化のツールとして、ど祭りが役に立てるかもしれないと、考えるようになります。
「期待」という言葉が非常に重要です。学生時代、祭りの資金作りをしていた頃、あるタバコ屋のおばあちゃんに協賛をお願いすると、金庫から紙幣と小銭を取って私に託してくれました。おばあちゃんは何個のタバコをこの場所で売ってこのお金を得たのだろうか。とても大事なお金を託してくれた。これって、期待されているなと感じるんですよね。また、祭りが６年目を迎えた時に、当時８歳の女の子から手紙をもらったんです。今からつらい手術を受ける白血病の女の子。手紙には、「私はど真ん中祭りに参加して大きな舞台で踊ることが夢だから、その夢を叶えるために手術を頑張ります」と書かれていました。
タバコ屋のおばあちゃんや女の子のお手紙から、期待に応えたい、それこそが使命だという思いへの変化が、この拡大期にあったんです。

●夢をかたちに

「夢」具現化のプロセス。まず若者のエネルギー・発想、大人の具現化する力との出会い。次に期待感と使命感を経て、最後に１人の夢がみんなの夢になっていく。これが今から大志を抱く、夢をもって、学生消防団、学校、友だちだけじゃないフィールドで活躍できるみんなに贈るメッセージです。

パネルディスカッション　活動事例発表会

学生消防団の活動紹介ビデオを上映

あいち学生消防団 平成 29 年度 活動事例発表 DVD を作成し、上映しました。

（司会）荒戸（あらと） 完（かん）氏　／　（コーディネーター）水野 孝一氏

パネリスト
- 東北若者（とうほくわかもの）10000（ばん）人会議（にんかいぎ）代表　宮城大学３年　佐々木（ささき） 崇宏（たかひろ）さん
- 南三陸町語り部団体発起人　日本大学４年　田畑（たばた） 祐梨（ゆうり）さん
- 防災・支援団体「彩り」代表　関西大学４年　武田（たけだ） 彩（あや）さん
- 2016 ミスユニバース熊本代表　熊本大学５年　松本（まつもと） 紗也加（さやか）さん

佐々木 崇宏さん

田畑 祐梨さん

武田 彩さん

松本 紗也加さん

わかものが地域を支えるとは、そして学生消防団員に期待すること

●自身の活動に「やる気スイッチ」が入ったきっかけ

田畑：私の「やる気スイッチ」はたぶん、私が団体を高校の時に立ち上げた時です。私の家が津波に流されたあと、２年経っても何もできない地元を見た時に、「大人ってなんてダメなんだ」「大人って全然やる気ないな」って思って。でもその時、怒ってばかりで何もしていない自分が、何かをやらなきゃと思った時が、やる気スイッチでした。
佐々木：僕は高校生の時、東北と関東それぞれの高校生が、東北の未来をマニュフェストにして政治家へ発表するという、東京でのイベントにたまたま誘われて参加しました。そこで関東の高校生たちが、僕の地元のことや、僕が知らない東北を話しているとき、僕は何も話せなくて。「なんで外の人がやってるのに、内にいる僕は・・・」と思い、そこから NPO で活動を始めたのがきっかけです。

●地域と繋がる必要性

武田：災害時要援護者の研究で、東北と熊本を例に出すと、東北って一家族の世帯数が多いし、同じ地区内に親戚がいる確率も高いです。その一方で熊本は核家族化が進んでいて、地区内に親戚とや知り合いがいない人の方が多くて。その結果、孤独死や震災関連死の割合が熊本は高かったんですね。そこで、地域と何かつながりのある方が、より健康な状態で生きられる確率や見つけ出される確率も上がるっていうのは言えますね。
田畑：私は避難所生活を半年間ぐらい経験したので、そこでお互いが知っている関係だったから頼ることができた。
避難を呼びかける時、隣のおじいちゃんは体が不自由だから助けが必要というのは、地域とつながっているから、わかるんですよね。他人に「ここは危ないんで逃げましょう」って言うのと、知人に「一緒に逃げましょうよ」って言うのは全然違う。だから地域とつながっておく必要性って大事じゃないかと思います。

●活動における学生の強み

田畑：私が今まで語り部の活動をしていて強いなって思ったのは、学生は失敗しても許される、何回でも失敗できる環境。助けてくれる人も周りにたくさんいて、同じような失敗を経験した人たちが周りにいるっていうことが強かったなって。助け合いながら、よりよくしていく環境が学生ならでは。あとフットワークの軽さも強みかなって。
松本：学生は時間の制限があまりない。仕事しながら何かするって、抱えるものが多くなってしまうと思うので、社会人になる前の、より責任が軽いところに今いるからこそ、一つのことにチャレンジしやすく一歩踏み出しやすい。ユニバースの活動へのチャレンジもそんな意識で、いろんなことにチャレンジしやすいことが強みかなって思います。

●あなたにとって『防災』とはなにか

武田：「大切な人を守るための手段」です。防災をせずに災害が起きて、大事な人が目の前で亡くなったら絶対後悔する。
「防災」は、こうすればよかったという後悔を無くすことだと思っています。
佐々木：一番は「繋ぐこと」です。僕の地元の集落のひとつが壊滅はしたんですけど、被害者０人というところがある。昔、三陸大津波の経験から、ここから下に建物を建てちゃいけないとか、災害が起きた時はこうしろよという言い伝えを守ってきた。僕たちは、東日本大震災を経験してきているので、次の世代に繋ぐことが使命だなと思っています。
田畑：卒論でも書いたんですけど、日本人とか私たちって、今ある防災に頼りすぎている。日本って防災大国と言われているんですけど、世界でみれば日本より防災先進国はあるので。「常に学び続けること」が防災のひとつの形じゃないかなと思っています。